はれる。これから愈送別會の用意にかゝるのである。三年は送別會について斡旋する、二年が主になつて寄宿舍内の飾付をする。どんな趣向で送別の日を花やかに飾らうかといふ事に苦心する、議定つて一年は其の助手として一生懸命に働く。各寮は秘密の中に着々と事を運んでゆく。

□此準備の最中に火事の練習が行はれた、一つ宛風呂敷包を持つて白張を立てゝ廣場に集つた時は只寒いと感じた丈であつた。

□卒業式近くなると舊御部屋會、舊々御部屋會舊々御部屋會などゝいつて上級の人達で食堂が賑ふ、一年生だけがつまらなく淋しい。上野の鐘が身にしみて鳴る。

□卒業式の朝はお祝ひのしるしとあつて赤い毛布で寢臺の上に海老を作る事が例になつてゐる、おいしさうな海老もあるし、尾の曲つた不器用なのもある。

「一年生は一日海老の中に入つて居なくつちやならないのですよ」

二年あたりの人が頻りにかつぐのである。そして田舍出のぼつとした私の樣なものはうま〳〵と釣られて了ふ。

□また其朝は卒業生の方がお化粧をなさるので。

「依田(湯番)がピンと上下をきてねお湯をもつてゆくんですよ、だから暗い中に起きて見に行きませうね」と誠しやかにいふのも多く二年の人。そして依田の上下姿はかつて開闢以來誰も見たことがないのである。

何年かの間繰返された傳說がだん〳〵亡びて了ふ、そして日毎に新しくなつてゆく、それが文明の進步なのであらう、けれども亡びゆくものを惜しむ氣持、夢の樣な傳說をなつかしむ氣持から脫する事が出來ないで私はかうして新舊の間をさまよつてゐる。

(大正三、一〇、二九)

■批評

第十號に際して

下田次郎

(一日幹事は教育教官室に伺つて文科會誌創刊者としての先生に御話を願ひました。文責は全部記者にあるのでございます。)

文科會誌も愈十號に達したといふ事は先づ以てお目度い次第である。代々の部長や委員の盡力によつて余程近來は進步して來た樣に思はれる。尙色々かくあり度いと思ふ事も多いが此會誌の性質上その編輯其他の事は凡て生徒がするといふ事にしたい。外の人を賴む事は其の動機も違ふから存在の意義が別になる。よく出來ても出來なくても生徒がするといふ事を忘れない樣にしたい。一方卒業生からの寄書もあつて敎師としての生活なり其の地方、學校の狀況を知つて他日敎職を奉する時の參考心得になる記事も澤山あつていゝと思ふ。談話會が時々あつて他所の人を呼んで來て其の話を聞くのもいゝが其筆記を載せる樣な事は寧ろ雜誌としては第二次的の事であらう、之が爲に多くの誌面を捧ける必要もない。紙面の大小も大切な問題ではない。少ければ少いまゝで出す。つまり此雜誌としての立場から集めえられるものだけを集めて出せばよいのである。

一体に文科的材料の多いのは當然の事で歷史地理文章詩歌もあるだらう。しかしこゝの文科は敎育といふ事を常に考へねばならぬ。廣い意味で敎育に關する研究、時には敎授法に關する事も出てもいゝ。純文學雜誌となつてはいけないのである。敎育上の事は文學的に取扱はれないといふ事もない。文學的趣味を敎育で論ずる事も出來るのである。題目も敎育に亘つた事があつて欲しい學校生活の記載も結構である。記憶は案外あてにならぬものである。其生活の實際を各人の筆で感じたまゝ有つたまゝに書いておくといふ事は他日の思出となつて記憶以上にいき〳〵として當時を思浮べる事が出來る、卽裏面の學校生活史ともいふべきものである。故にかういふ方面も今少しあつていゝと思ふ。讀んだ本の內容を紹介し其批評をするのもよからう。又圖書室に來る文科的新刊書の紹介をする事は地方に居る人には有益だと思ふ。又望み難い事かもしれないが少しは英文欄もあつて作文として出すものでなければ讀んだ書物中のよい一節を出して其の解說をするとか味つた所を主觀的に述べる事もよからう。尙雜誌は文科の研究の案內ともなる樣にならばよからうと思ふ。此雜誌を見れば研究する上に色々指示される事もあり暗示をうける事もあり內外の人に係らず研究するに此雜誌を見て都合がいゝ樣になつたらいゝ事だらう。